

一九九八年度総合文化研究所活動報告

公開講座

主催 総合文化研究所

後援 財団法人国際言語文化振興財団

「外国文学を翻訳する」九月二十五日～十一月六日 全七回
沓掛良彦・小林二男・荒このみ・藤井守男・岡村多希子
関口時正・谷川道子

公開講演会

主催 総合文化研究所

後援 財団法人国際言語文化振興財団

・「メロドラマの論理」十一月五日

四方田犬彦

・「浮気」のすすめ」十一月二二日

米原万里

コンサート・講演会（四月十六日）

主催 中野健三基金

共催 総合文化研究所

後援 岩崎民平基金

・講演「音楽における無限」

中沢新一

・コンサート「シヨスタコーヴィチ弦楽四重奏曲七番・他」

シヨスタコーヴィチ弦楽四重奏団

各種研究会

ロシア文学研究会 毎月第一・第三水曜日

朝鮮文学研究会 毎月第二土曜日

スペイン語文学研究会 毎月第三土曜日

編集後記

特集の内容に関して何度か編集会議が開かれましたが、中国、朝鮮、モンゴル、そして日本に共通する文学上の普遍的なテーマを探すのに四苦八苦しました。そもそもモンゴルは「東アジア」なのか？ モンゴルの「近代文学」とは何か？ 議論の入口となるこんな基本的な問題を前にして、私はしばしば立ち往生せざるをえませんでした。結局、共通のテーマは見つけられず、ごらんのような結果になってしまいました。が、有意義な経験を見せていただいたと思っております。(岡田和行)

今回は東アジア、日本課程所属の教官の編集によって、東アジアの文学Vの特集をお送りすることになった。私も論文を投稿させていただいているが、日本文学の担当者としては、隣国の文学への無知さを痛感させられることになった。本来なら東アジア全域の文学に目配りをしながら日本文学を論じるべきであったが、その比較の基盤があまりにも乏しく、結局自身のこれまでの関心から、満州で少年時代を過ごし、その△荒野Vをモチーフのなかに取り込みつづけた安部公房を論題とすることになった。しかし安部公房を△東アジアの文学Vとして位置づけるには至らなかつたというのが率直な感想である。近年川村湊氏らの研究によって戦前、戦中の植民地下の文学に光が当てられつつあるのは周知だが、ナショナル・アイデンティティーのゆらぎのなかでの表現があらためて問い直されなくてはならない状況は今後ますます明確になると思われる。今回の特集に収められた諸論文が、その問題を考える上での補助線を投げかけてくれていることを期待したい。(柴田勝二)

本号には上海復旦大学の張振華氏にも原稿を寄せていただいた。同氏には本年一月二十九日、本学で中国映画についての講演もしていただいた。

本研究所、本誌が学内だけでなく、国際的な交流の場としても機能していくことは望ましいことである、と思う。

本号の編集が終わった。といっても実務的なことは吉本先生、教務補佐の岸井さん、鴻野さん、蕭さんにしていただいた。

ありがとうございます。(小林二男)

『総合文化研究』も2号になりました。創刊号を引き継ぐだけですから特に苦労ありませんでした。原稿も自然に集まりほぼ軌道に乗ったようです。特集の内容に合うものは執筆者に無断でその項目に組み入れました。また表紙やカットに自由に作品を使うことを快諾してくださった韓国のキム・チョムソンさん本当にありがとうございます。またこうした出版で大変なのは執筆者より実務担当の仕事でしょう。昨年はかなり苦労したようですので今年の方針は無理をせず作業ができることにおきました。スタッフの吉本さん、教務補佐の岸井さん、鴻野さん、蕭さんのご苦勞に感謝します。かなりいろいろな可能性が見えてきました。東南アジア特集の第3号はさらに充実することと思いい期待しています。(三枝壽勝)

1999年3月25日発行

Trans-Cultural Studies No.2
総合文化研究 第2号

編集委員 三枝壽勝（編集長） 小林二男
岡田和行 柴田勝二

編集スタッフ 吉本秀之 岸井紀子
鴻野わか菜 蕭幸君

発行 東京外国語大学総合文化研究所

東京都北区西ヶ原 4-51-21

〒114-8580

電話 03-5974-3307

ファックス 03-5974-3153

ホームページ <http://caper.fs.tufs.ac.jp>

印刷 (株) 壽工業写真社

東京都北区滝野川 1-90-8